

 ニューイヤー名曲コンサート2026

❖❖❖ **プログラム** ❖❖❖

新年明けましておめでとうございます。2026年最初のCDコンサートは、年明けにふさわしい名曲の数々をお届けします。ウィーンでは今年も恒例の「ウィーン・フィル ニューイヤーコンサート」が行なわれました。1975年生まれのカナダ出身の指揮者、ヤニック・ネゼ＝セガンを迎えるという、驚きの人選でしたが、時代の変化を感じられずにはられません。そこで最初に、懐かしの1984年ロリン・マゼール（1930～2014）が指揮したニューイヤーコンサートから2曲をお送りします。マゼールは1980年の初登場から、1986年まで7年連続で登場、最後となった2005年までに計11回指揮をしている常連の指揮者でした。ロマン派屈指の名協奏曲として知られるシューマンのピアノ協奏曲イ短調は、現代最高峰のピアニスト、マルタ・アルゲリッチ（1941～ ）の独奏、名指揮者ダニエル・バレンボイム（1942～ ）指揮ベルリン・フィルによる演奏です。アルゲリッチはこれまで、セルジュ・チエリビダッケ、小澤征爾、クラウディオ・アバドをはじめ、数多くの指揮者たちとこの曲で共演を重ねている、最も得意とする作品のひとつですが、今回は2023年の最新の録音でお聴きください。後半はフランスの作曲家シャブリエの作品を2曲、代表作の狂詩曲「スペイン」と、対照的に重厚な作風の歌劇「グヴァンドリーヌ」序曲を、イギリスの名指揮者ジョン・エリオット・ガーディナー（1943～ ））、フランスの名指揮者ピエール・デルヴォー（1917～1992）指揮による演奏でお聴きいただき、最後はシャブリエと同年生まれのチェコの大家ドヴォルザークの交響曲第8番で締めくくりたいと思います。小澤征爾指揮ウィーン・フィルによる名演奏でお楽しみください。今年もよろしくお願いいたします。（中川）

【思い出のニューイヤーコンサートから～1984年】

フランツ・フォン・スッペ（1819～1895）：

喜歌劇「詩人と農夫」序曲

ヨハン・シュトラウス2世（1825～1899）：

円舞曲「ウィーン気質」Op.354

ロリン・マゼール指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（1984.1.1 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive）

ロベルト・シューマン（1810～1856）：

ピアノ協奏曲イ短調Op.54

マルタ・アルゲリッチ（P）
ダニエル・バレンボイム指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
（2023.1.7 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive）

*** 休憩 ***

エマニュエル・シャブリエ（1841～1894）：

狂詩曲「スペイン」

ジョン・エリオット・ガーディナー指揮フランス放送フィルハーモニー管弦楽団
（2022.9.23 パリ、ラジオ音楽館・オーデイトリアムでのLive）

歌劇「グヴァンドリーヌ」序曲

ピエール・デルヴォー指揮NHK交響楽団
（1978.11.8 NHKホールでのLive）

アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）：

交響曲第8番ト長調Op.88

小澤征爾指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
（1992.4.26 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive）

曲 目 解 説

スッペ：喜歌劇「詩人と農夫」序曲

スッペはベルギーの家系でオーストリアのダルマチア地方スパーラトで生まれた作曲家で、少年時代にフルートを学び、13歳の頃和声学を勉強、14歳の時に地元のフランシスコ教会のためのミサ曲を作曲しました。その後ウィーンに移り、ウィーン音楽院のジモン・ゼヒター、イグナーツ・サイフリートに師事。43歳でアン・デア・ウィーン劇場、バーデン歌劇場の専属となり、ヨーゼフレオポルトシュタット劇場で指揮者として活躍。各劇場公演のために100曲以上の作品を作曲し、ウィーン風の優雅な雰囲気とイタリア風の明快な旋律は一世を風靡しました。「詩人と農夫」はヨーゼフシュタット劇場の楽長を努めていた1846年ころに、カール・エルマーの劇のための付随音楽として作曲され、1846年8月24日にアン・デア・ウィーン劇場で初演されました。スッペの没後、ゲオルク・クルーゼが、1900年ころにスッペの他の作品と組み合わせてオペレッタとして上演し、成功を収めました。現在では序曲だけがスッペを代表する一曲として知られています。

ヨハン・シュトラウス2世：円舞曲「ウィーン気質」 作品354

ヨハン・シュトラウス2世は「ワルツの父」と呼ばれたヨハン・シュトラウス1世の長男として生まれ、父の猛反対にもかかわらず、ワルツをはじめ、ポルカ、マズルカなどに数多くの名作を残し「ワルツ王」と呼ばれました。後年は喜歌劇に力を入れ、「こつもり」、「ジプシー男爵」といった傑作オペレッタが生まれましたが最晩年に作曲された「ウィーン気質」は未完に終わりました。同名のワルツ「ウィーン気質」は、1873年5月に開催されるウィーン万国博覧会の開幕に合わせて作曲されましたが、オーストリア＝ハンガリー皇帝フランツ・ヨーゼフ1世の長女ギーゼラとバイエルン王子レオポルトの結婚式が行われた1873年4月20日から二日後の4月22日、この婚礼を祝うためにウィーン楽友協会黄金の間で行なわれた「宮廷オペラ舞踏会」において演奏されました。翌5月にはウィーンのブルク劇場で正式に初演されています。甘美なウィーン情緒あふれる名曲です。

シューマン：ピアノ協奏曲イ短調作品54

ロマン派を代表する大作曲家シューマンは、30歳までに数多くのピアノ曲の名曲を作曲していましたが、ピアノ協奏曲はありませんでした。しかし1833年に具体的な構想が現れ、1841年に、約8年の歳月を経て第1楽章が完成、前年結婚したばかりのクララのピアノによって「幻想曲」として同年8月13日に、ライプツィヒのゲヴァントハウスで初演されました。その後1845年になってメンデルスゾーンのピアノ協奏曲を聴いたシューマンは、3楽章形態の協奏曲として完成させたいという気持ちが強くなり、「幻想曲」の後に更に2つの楽章を書き加え、1845年7月31日に全曲を完成させました。ピアノ協奏曲としての初演は1846年1月1日にクララのピアノにより、ゲヴァントハウスで行なわれました。しかし献呈はクララではなく、友人のピアニスト、フェルルディナント・ヒラーにあてられました。古今のピアノ協奏曲を代表する傑作のひとつで、演奏される機会も多く、最も親しまれている作品です。

第1楽章 アレグロ・アフエットウオーソ 第2楽章 アンダンテ・グラツィオーソ

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

シャブリエ：狂詩曲「スペイン」

シャブリエ：歌劇「グヴァンドリーヌ」序曲

フランスの作曲家シャブリエは、ドヴォルサークと同年の1841年1月18日、オーヴェルニュ地方のアンペールで生まれました。16歳の頃からピアノを始めますが、1856年一家がパリに移るとともに法律を学び、1862年学位を取ると内務省の官吏となり、1880年までその職にありました。しかし同時に、ピアノ、対位法、和声学について本格的な勉強を始め、役人として務めながら作曲活動も開始しました。ダンディ、デュパルク、フォーレらの音楽家、マネ、ヴェルレーヌらの芸術家との交友の中から刺激を受けながら、ピアノ曲、管弦楽曲、歌劇などの作品を残しました。狂詩曲「スペイン」は1882年秋のスペイン旅行で知ったアンダルシア地方の踊りや歌の印象をもとに作られた作品で、マラゲーニャとホタのリズムや旋律を巧みに使った華麗なオーケストレーションは見事で、シャブリエの最も有名な名曲です。1883年11月4日、パリでラムルーの指揮で初演されました。歌劇「グヴァンドリーヌ」はデュパルクと共にドイツ旅行をした際に、初めてワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」にふれ、強烈な印象を持ったシャブリエが1885年に書き上げた作品です。軽快な作風の多い他のシャブリエの作品とは一線を画した重厚でドラマティックな曲想は序曲にも良く表れています。

ドヴォルサーク：交響曲第8番ト長調作品88

チェコの大作曲家ドヴォルサークは9つの交響曲を作曲しましたが、生前に出版されたのは第5番以後の5曲で、その後残りの4曲が出版され、年代順に整理されたため、昔第4番と言われていた交響曲が第8番、第5番は第9番「新世界から」と呼ばれるようになりました。交響曲第8番は1889年秋にチェコのヴィソカー村の別荘で完成され、1890年2月2日、プラハのルドルフィルム（芸術家の家）で作曲者自身の指揮で初演されました。出版の際に従来の出版社との折り合いがつかず、イギリスのノヴェロ出版社から出されたため、時に「イギリス」の別名で呼ばれることもありましたが、曲の内容とは一切関係ありません。曲は徹底してボヘミア風の民族色の強いもので、独創性にあふれ、生気に満ちた力感や親しみやすい曲想など、「新世界」同様に高く評価されている傑作です。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ

第2楽章 アダージョ

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ

第4楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツボ